

中世の都市における店舗の建築

後藤 治

Shop Architecture in the Medieval Japanese City

はじめに

- ① 絵画史料にみる初期の店舗
 - ② 『洛中洛外図屏風』歴博甲本の店舗
 - ③ その後の店舗の建築
- おわりに

【論文要旨】

本論は、絵画史料をもとに、平安時代末から江戸時代初頭にかけての店舗の建築とその変遷について検討したものである。中世前半までの初期の店舗は、通りを意識した建築として、おもに既存の町家を改造する形で生まれたと推定される。商品としては、食物・履物等の日用品を扱う店舗で、専門品を扱うものではなかった。店舗は、時代とともに棚を常設化した専用建築へと変化した。中世前半までは通りとの関係はそれほど強いものではなかった。このため、鎌倉時代末には各地の都市で店舗がみられるようにはなっていたが、店舗が通りに面して軒を連ねる風景はみられなかったと考えられる。それが最初に確認されるのは、一六世紀前半に描かれた『洛中洛外図屏風』歴博甲本においてである。歴博甲本にみられる店舗は、専門品を扱うものが多数を占めており、商品を並べる棚は大きく、棚の構造は仮設的である。この歴博甲本にみられる店舗や棚には、中世に市が通りにおいて行われるようになったことからの

影響をみることができ。ただし、歴博甲本にみられる店舗や棚は、通りの市を常設化したものというよりもむしろ、商家が、往来との取引を意識して、契約の場の前にサインとして設けたものと考えられる。一六世紀前半から近世にかけては、商品を陳列する棚と契約の場を、通りに面した部屋で兼ねる商家が多くなる。これによって、店舗の建築と通りとの密接な関係が確立し、近世の町家にみられる通りに面した部屋「ミセ」「ミセノマ」が生まれたものと考えられる。この変化によって、店という語そのものが、商品を置く棚を意味する語から、建物の内部を指す語へと変化した。同時に、商人が契約に使う家屋であった商家は、店舗を併用する商店へと変貌した。

はじめに―町家と店舗

■町家の発生

建築史学では、江戸時代の庶民住宅を、町家と農家というふたつの類型に大別することが多い。町家は、間口が狭く奥行きが深い敷地のなかにあつて、道路に面して建つ形態をとる。この町家という建築類型が、いつ頃どのようにして発生し普及したのかは、建築史学の大きな関心事のひとつである。

かつて、町家の発生や普及は、店舗と関係するものと考えられていた。建築史学の分野から、中世の庶民住居にはじめて詳細な検討を加えた〔伊藤鄭爾 一九五八〕（以下「一」）は後掲註の参考文献を示すも、その視点に立っている。もちろん、建築史学以外の日本史学等の他分野においても、この学説はしばしばとられている。

けれども、近年の研究により、古代から中世にかけての初期的な町家の発生や普及と店舗とは、関係ないことが明らかになってきた。それは、〔野口 一九八七〕、〔伊藤毅 一九九二〕に代表される。

近年の研究による町家の発生に関する見解としては、僧房のような長屋式の供給住宅からの発達、道路との敷地の境界装置という機能からの発達等の説が出されている。なお、店舗との関係は否定されているが、都市における高密度な居住状況の発生による住宅建築の細分化、枚敷のような接道した仮設建築の常設化等の、町家の発生に関する他分野による既往の学説については、発生の主要因と解釈するかどうかは別にして、肯定的に扱われている。

■店舗と建築

敷地の奥まった場所に店舗があるよりも、道に対して店舗を開く方が、

往来相手に商売ができるので、商売にとって有利である。現在でも、多くの店舗は接道して設けられている。この観点に立つと、店舗の発生や普及は、建築を敷地の奥から接道する正面側に押し出す力となったという仮説が導かれる。かつての学説が、町家の発生と店舗を関係付けていたのも、この魅力的な仮説に依拠している。

初期の町家の発生や普及と店舗との関係がないとすれば、以上の仮説はどう解釈・訂正すればよいのだろうか。前記した町家の発生について言及した諸研究は、その疑問には答えてくれない。例えば、〔伊藤毅 一九九二〕は、「町屋と棚は道との関わりという観点からすると、極めて近い関係にあることは事実で、棚は町屋を道に開かせるために不可欠な媒介装置であった」と述べるが、棚（店舗）がいつ頃どのようにして町家を道に開かせたのかは触れていない。

このため、古代から中世にかけての店舗と建築の関係を直視してみようというのが、本論の第一の目的である。

古代から中世にかけてつくられた店舗は、現存しない。そこで本論では、絵画史料を用いて、店舗と建築の関係を直すことにしたい。なぜなら、当時の店舗の建築を視覚的に判断できるのは、絵画史料しかないからである。

絵画史料を検討するにあたって、本論ではいくつかの視点を留意した。ひとつは、店舗の建築形態や構法を検討することである。次に、売買されている商品の品目並びに商品の並べ方や置き場所を検討することである。さらに、売買を行う人物の姿勢や位置を検討することである。これらは、いずれも絵画史料から読み取り可能なもので、建築の設計や計画を行う上において重要な項目である。

これらの検討によって、古代から中世にかけての店舗の建築に関する歴史の変遷をたどることが、本論の第二の目的である。

図1 『年間行事絵巻』の店舗
(右がA、左がB)

図2 『長谷雄草紙』の店舗

図3 『直幹申文絵詞』の店舗
(右がA、左がB)

図4 『石山寺縁起絵巻』の店舗

▲図5 『一遍上人絵伝』の店舗

図6 『福富草紙』の店舗

表1 古代～中世前半の店舗の建築形態と構法

史料名	場 所	店の形式	棚の高さ	建物の間口	建物の仕様	商 品
①年中行事絵巻	京都A	附属棚（方杖形式）	胸高	売場＋土間	網代壁、板葺	食物
	京都B	附属棚（方杖形式）	胸高	売場＋土間	網代壁、板葺	食物
②長谷雄草紙	京都	常設棚	胸高	売場＋扉口＋？	板壁、網代壁、板扉	食物、履物
③直幹申文絵詞	京都A	常設棚	床高	売場＋部屋	板壁、網代壁	食物、履物、薪
	京都B	附属棚	腰高	売場＋土間	板壁、板葺	食物、履物、紙、薪
④石山寺縁起絵巻	大津	附属棚	腰高	売場＋土間	板壁	食物、履物
⑤一遍上人絵伝	鎌倉A	附属棚	腰高	土間＋売場	板壁、板葺	食物、器、履物
	鎌倉B	附属棚、側面板壁・柱1本軒まで伸びる	腰高	土間＋売場	板壁、板葺	食物、器、履物
	三島神社前	常設棚	床高	売場＋？	土壁、茅葺	食物
	大津	常設棚	胸(腰)高	土間＋売場	板壁、板葺	食物
	京都A	常設棚	胸(腰)高	土間＋売場	板壁、板葺	薪
	京都B	常設棚	腰高	売場	板壁、板葺	食物
	京都C	附属棚、柱軒まで伸びる	腰高	売場	板壁、板葺	食物、履物
⑥福富草紙	京都	常設棚、隅柱1本省略	腰高	売場＋土間	板壁、土壁	食物、履物、巾着、紐

表2 古代～中世前半の店舗の商品と売買する人

史料・場面等	場 所	商品の置き場所	店員着座高と棚高	売買する人の場所・姿勢
①『年中行事絵巻』 巻十六の毬杖	京都A	棚、吊るす、土間床	棚＞人	店員：棚の後ろの女、土間床に立つ女 客：土間床に立つ男
	京都B	棚	棚＞人	店員：棚の後ろの女 客？：土間に立つ男
②『長谷雄草紙』 紀長谷雄の屋敷外	京都	棚、吊るす	棚＞人	店員：棚の後ろの女 客：棚の前に立つ
③『直幹申文絵詞』 巻一	京都A	棚、土間床、吊るす	同一	店員：棚の後ろに坐る男(?)
	京都B	棚、吊るす	棚＞人	店員：棚の後ろに坐る女(?)・土間に坐る女 客：道に坐る男
④『石山寺縁起絵巻』 巻一	大津	棚、土間床	人不在 棚＞人か？	屋内土間に坐る子供
⑤『一遍上人絵伝』	鎌倉A	棚、吊るす	棚＞人	店員：棚の後ろに坐る子供
	鎌倉B	棚、吊るす	棚＞人か？	なし
	三島神社	棚、吊るす	不明	絵の描き方の関係で確認できない
	大津	棚	棚＞人	店員：棚の後ろに坐る子供
	京都A	棚	不明	絵の描き方の関係で確認できない
	京都B	棚	棚＞人	店員：棚の後ろに坐る子供
	京都C	棚、吊るす、棚の奥	棚＞人	店員：棚の後ろに坐る子供
⑥『福富草紙』 福富が町中を帰る場面	京都	棚、吊るす	棚＞人	店員：土間から覗く女(店主?)・子供

① 絵画史料にみる初期の店舗

古代から中世前半にかけての絵画史料で、店舗を描いたものとして、図1～6がある。それらを、建築の形態や構法に注目して整理したものが、表1・表2である（以下○付きの数字は、表の番号を示す。⑤のように複数箇所あるもので、それぞれを区別して記す場合には、番号の後に地名を付けた）。

①は平安時代末期の作（現在のものは江戸時代の模本）、②③は平安時代の風景を鎌倉時代後期に描いたもの、④⑤は鎌倉時代末期の作（ただし④は平安時代の寺院創設時を描く）、⑥は室町時代前期の作である。

■店舗の数量・分布と位置

②を除くといずれも、庶民住居が並ぶなかに1軒ないし2軒の店舗を描いている。このため、先学が指摘した通り、店舗の発生と町家の発生が関連付けられないことは明らかである。

③⑤鎌倉では、隣接して2軒の店舗を描いている。また、①では、隣接はしていないが2軒の店舗が描かれている。このことから、中世前半までには、都市のなかで通りに面した店舗が目立つ存在になっていたことがわかる。「高橋二〇〇一」は、①の風景やいくつかの史料等をもとに、十一世紀には、店舗併用の小住宅が、京都という都市に立ち並ぶ状況が生まれていたものと推定している。さらに、⑤のように店舗が各地に描かれていることから、鎌倉時代末期には、人口が密集した都市や地域ではどこでも、通りに面した店舗が目立つようになっていたことがわかる。

一方、④や⑤鎌倉⑤大津をみると、店の周辺には接道しない家も目立

つ。また、⑤鎌倉の店舗は、町並みの奥まった位置に描かれている。③でも、2軒の店舗の正面が、矩の手に異なる方向を向くように描かれており、特定の通りに面して建物を構えた形をとっていない。このことから、鎌倉時代末期までの店舗は、都市という高密度な居住形態の場に存在したものの、必ずしも通りとのかかわりが密接とはいえず、往来相手に商売するという意識が強くなかったことがわかる。

■店舗の建築

②以外のものはすべて、店舗を独立した建物（以下「独立建物型」という）として描いている。②については、売場と扉口以外を網代壁が連続する形に描くので、長大な建物の一部に店舗を開いた形を描いた可能性がある。

独立建物型の店舗のうち、③京都A、⑤京都B・C、⑤三島を除くものは、いずれも商品を並べる棚がある売場部分と土間床部分によって、建物の間口幅が構成されている。これは、一列型と呼ばれる平面形式をもつ町家において、床上部の正面側を売場とした構成といえる。

③京都Aは棚のレベルをみると、町家の土間部分を売場にした形で、多くみられる例の反対の構成といえる。⑤京都B・Cは、町家から土間を省略した形である。二例とも店舗の側面に路地があり、建物は路地に對しても開かれている。このため、路地が土間の役割を果たすと考えると、機能的には町家形式のものに近い。⑤三島は、部分を描くのみなので、建物の全体像は不明である。

以上のことから、中世前半までの店舗の建築は、全般的に通常の町家の建築と似ているといえることができる。

次に店舗特有の設備といえる棚の形式をみると、建物に造り付ける方法と棚の高さというふたつによって分類できる。

造り付け方法は、棚の下を吹き放し、建物に仮設的に附属させたよう

なものを「附属棚」、板等で棚の下を塞ぐ形で、建物に建て込まれたものを「常設棚」とした。全体をみると常設棚が多い。附属棚のうち、最も仮設的なものは①でみられる方杖で支える形式で、これは他にはみられない。また、最も常設に近いのは、⑤にみられる棚を支える柱を軒まですばしたものである。このことから、時代とともに棚が常設化される傾向にあったことがうかがえる。

棚の高さは、①②では立った客の視線の高さに棚がある「胸高」だったのが、③④⑤では立った客が棚をみおろすような「腰高」が中心になっている。⑤で胸高としたものも、①②に比べると低い位置に棚を描いている。このことから、棚の高さは時代が降るとともに低い位置になったことがわかる。これは棚上の商品が客からみやすくなったことを意味する。

以上のような棚の造り付け方法及び高さの変化から、商品を並べる装置としての棚の重要性が時代とともに増したことがわかる。

■商品

店舗に置かれる商品の中心は、食物である。唯一の例外は⑤京都Aだが、これは、商品全体がみえない形で描かれているためである。

食品以外の商品としては、履物（草鞋、草履等）を置く店が多い。履物が多いことは、買い手に一定以上の身分の者や、道を通行する者が想定されていたことを示している。このように、店舗の数や立地からは、通りととの密接な関係はうかがえなかったが、商品からみると通りととの関係がうかがえる。

他の商品としては、薪、紙、紙、器等がみられる。このことから、日用品が商品の主であったことがわかる。また、多くの店では複数の日用品を並べている。このことから、当時の店舗は、商品からみるといわば現代のコンビニエンスストアに近い性質のものだったと考えられる。

現代の都市においても、同一地域内に複数のコンビニエンスストアが並ぶ風景はしばしばみかける。けれども、それが軒を連ねて多数並ぶことはない。むしろ、コンビニエンスストアの特質は、都市の人が集まる場所のどこにでも存在する点にある。先にみたように、店舗と通りととの関係が必ずしも密接ではなかったひとつの理由は、店舗のコンビニエンスストア的な性質によるものといえそうである。

③⑤鎌倉・京都では、同一地域内に複数の店舗がみられるが、いずれも類似の商品を扱うコンビニエンスストア的な店舗である。この風景から、都市のなかで通りに店舗が軒を連ねる風景が成立していたと結論付けることは危険である。むしろ、店舗のコンビニエンスストア的な性格からみると、これは街区に数軒あった程度の店舗を風景として描いたものと考えた方がよいように思われる。

現代においては、類似の商品を扱う店舗であっても、それが多数集中して通りに軒を連ねる地域がある。東京の秋葉原電気街のような、専門性の高い商品を扱う地域である。中世前半までには、こうした地域はなかったのだろうか。通常①は、魚を売る店舗が集まる地域を描いたものとされている。「高橋二〇〇一」は、これを市に常設された建物とみている。これらの見方が正しければ、①は魚市に常設された店舗で、専門店舗に類したものが、平安時代末期に存在したことになる。

市と店舗との関係の検討は後に譲るが、ここで注目したいのは、商品の並べ方である。①の商品は、棚に並べる、上から吊るすという、②③⑤に描かれた他の店舗と同じ方法がとられている。他の例では、食品が棚に並び、履物等が上から吊るされている。①の場合、絵が簡略なため、魚屋のように解釈されているが、商品の並べ方からみて、他と同じ性格の店舗を描いたものと考えられないだろうか。そうだとすれば、①からも独立建物型の店舗が軒を連ねる風景は想定されない。①では、店舗を連続させず、わざわざ一軒の町家をはさんで二軒の店舗を描いている。

このことも、当時の店舗の性格を示しているように思われる。

以上のことから、中世前半までには、独立建物型の店舗が通りに面して軒を連ねる風景が存在したことは確認できない。また、それが一地域に集中して存在した可能性も極めて低い。ここではそう結論付けたい。

■商売のスタイル

店員は、ほとんどの例で棚の後ろにいたことが確認できる。姿勢が確認できるものとみると、店員は坐っていたようである。また、店員は土間にいることも多く、土間は作業の場としてだけでなく、①③④のように客に対する商売の場や商品の置き場としても使用されている。このことは、初期の店舗では往來の者だけが客ではなかったことを示しており、先に店舗の数量等から確認した結果と共通性がうかがえる。

店員と棚との高さ関係をみると、店員が着座する位置より高い場所に棚を描いている。このことから、棚を使った商売のスタイルは、現代の鉄道駅でみられるキオスクのような形であったと考えられる。

店員がいる棚後方の屋内に注目すると、⑤京都Cを除くと、商品は置かれていない。これは、棚と店員のいる場所が空間的に区分されていたことを示している。⑤京都Cでは、屋内にも棚と連続する形で商品を描いている。これは、棚と部屋に連続性があり、通りに対して内部まで開く形で、店舗と通りの関係が強い姿といえる。

このことを先にみた棚の造り付け方や高さの変化とあわせて考えると、時代とともに店舗と通りの関係が密接になり、往來を相手に商売を行うことが意識されるようになったものと考えられる。

店員の性別・年齢をみると、女・子供の場合が多く、家長にあたる人物が店内に描かれることは少ない。このことは、通りに構えた店舗の窓口販売的な業務が、中世前半までは商人の主たる業務ではなかったことを示している。同時に、商売の上で、通りに面した店舗の役割が、それ

ほど重要ではなかったことを意味するように思われる。

客の側をみると、棚の前に立つ者、土間の中に立つ者、土間の前に坐る者がみられる。客が坐る例は③の一例のみで、それを見ると、土間や床高の棚に商品を並べる形式は、坐る客との商売を想定していたものと考えられる。反対に、床高以外の棚を設ける形の店舗は、立った客を対象としていたと考えられる。この点は、商品の履物と同様に、店舗の建築が通りを往來する人を意識してつくられたことを物語っている。

■市と店舗

店舗の建築はどのようにして発生したのだろうか。すぐに思い付くのが市との関係である。「店」という語は、市と関係している。

史料上では、十世紀後半に成立した『倭名類聚抄』に、「店家」を「マチャ」と読ませている。これが町家と店舗を関係付けるひとつの根拠とされてきた。これについては、マチャが市を意味するものであり、マチャは市に建つ仮設的な建物で、建築史上の町家には該当しないことを〔高橋二〇〇一〕が指摘している。

市に立つ建家は、簡略で仮設的な建物だった。絵画史料でいえば『一遍上人絵伝』の備前国福岡市や信濃国伴野市を描いた風景によって、その様子が知られる。

そこで、こうした市の建物が常設化して店舗となったのではないかという仮説が成り立つ。市と店舗の建築との関係について、〔高橋二〇〇一〕は、①の店舗を例にあげて、「見世棚は（中略）陳列台であるため窓の場合よりも敷居をかなり下に取り付けなければならない。それなりの設計・施工が必要であるので、ふつうの町家を後から改造するのはそれほど簡単ではない。この場面の魚屋は、専用店舗ではなく、店舗兼用小屋、つまり町小屋として始めからつくられたのであろう。これらの見世棚をもった町家の規模がとくに小さいのは、住人の経済力によるとい

うよりも、「町」(市)の建物の特色なのかもしれない。」と述べている。先にみたように、①の店舗を魚屋とみるのは疑問がある。さらに、市との関係にも疑問がある。その第一の理由は、店舗の建築にみられる棚の高さと客の姿勢が、市のそれとは異なるからである。『一遍上人絵伝』に描かれた市では、店員は地べた又は低い置き棚の上に商品を並べており、客は主に店の前に坐っている。これに対して、①の棚の高さは、立った客を相手にする形である。このことは、店舗の建築が、市の仮設建築と直結しないことを物語っている。

また、店舗の建築に対する「高橋二〇〇一」の見解についても疑問がある。①②にみられる棚の高さは、窓に近いもので、敷居を窓より「かなり下」には取り付けていない。また、①③⑤の店舗を建築するために「それなりの設計・施工」が必要であることは認めるが、それは町家の建築を改造してできないものではない。むしろ、町家の底部分だけを改造すればよいので、施工上さほど困難な工事とはいえない。①の方杖による棚の支持形式であれば最も簡単な工事ですむ。

以上のことから、筆者は初期の店舗は、むしろ、都市内の小規模な住宅建築を改造・改良することによって登場したものと考える。そして、それら初期の段階から、通りからの外来客に商売を行うことを意識したものが存在し、その例が時代とともに徐々に増加したものと考ええる。

②『洛中洛外図屏風』歴博甲本の店舗

前章でみたように、中世前半までには、店舗が通りに面して軒を連ねる風景は出現していなかった。それらは、いつ頃みられるようになったのだろうか。その姿を確認できる絵画史料は、降って一五三〇年代の景観を描いたとされる『洛中洛外図屏風』歴博甲本(以下「歴博甲本」と略す)(図7)になる。

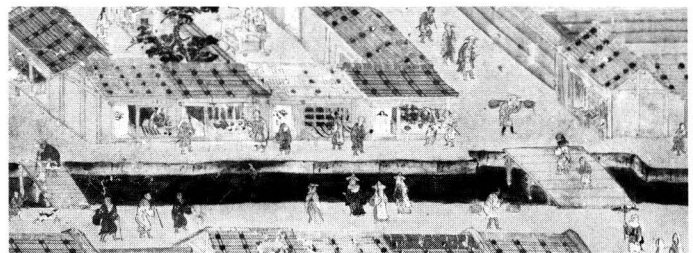


図7 『洛中洛外図屏風』歴博甲本の店舗

歴博甲本に描かれた店舗の建築について、前章と同様の視点から検討すると、いくつかの注目すべき違いが確認できる。

■中世前半までの違い

店舗の数量・分布については、全体の数量だけでなく、通りに面した数そのものが増加している。街区の通り側の建物すべてを店舗として描く場所もいくつもみられる。一棟の町家を複数の店舗が使用する形のものもみられる。配置については、町家の正面が通りに面してそろった形で描かれている。このことから、往来との商売に対する意識が高まり、通りに面した店舗の建築が重視されるようになったことがわかる。

店舗の建築の変化として注目されるのは、棚である。歴博甲本の棚は、

附属棚の形に描くものがほとんどで、常設棚はみられない。棚以外の建物部分をみると、棚を持たない他の町家とかわらない。このことは、中世前半までの店舗が時代とともに棚を常設化していたのと反対に、一般の町家との互換性が高まった形である。このように通りに対する商売意識と裏腹に、棚が建物の附属物へと変化することが特筆される。

一方、通りに対する商売意識と連動して、棚の重要性は増している。例えば、棚の幅や出は大型化しており、建物の軒先より外に出ているようにみえるものも多い。また、棚を建物の正面だけでなく側面に設けているものもある。これらは、中世前半から続いて、棚の重要性が増していることを物語っている。

商品については、種類が豊富になっている。さらに、特定の商品を選ぶいわば専門店の数が多くなっている。このことは、都市において流通し消費される商品が増加したこと並びに商品を扱う商人が増加したことを物語っている。専門店の増加については、店舗数の増加によって店舗どうしに差別化の必要性が生じたことが、ひとつの要因として考えられる。また、具体的な史料は持たないが、人口の増加や交通の発達による消費量拡大の影響もあったと思われる。

専門店の増加とは反対に、食物等の日用品を扱う店は目立たなくなっている。それらは、おもに振売りによって売買されている。これは、店舗を構える商人の性格にも変化があったことを物語っている。店舗にみられる店員も、中世前半までの女・子供だけではなく、店主と考えられる人物がみられるようになる。

商売のスタイルをみると、棚の高さと棚後方にある部屋の床高（店員の着座高）の差が小さいものが多数を占めており、なかには同じ高さのものもみられる。これは、棚と部屋の連続性が強まり、通りと建物の関係がさらに緊密になったことを示しており、前時代から続く傾向といえる。ただし、棚の高さについては、部屋の床高よりも高いものが多く、

棚と部屋の境に建具や格子を入れて仕切っているものが多い。また、部屋と棚に商品を連続して並べた例も少ない。これは、棚と部屋が空間的には区分されていたことを示している。中世前半までは、棚と部屋の境に建具等を入れているのは⑥の一例のみである。この点からみると、棚と部屋の区分は、歴博甲本の方が明確化しているといえる。

このように歴博甲本にみる店舗の建築は、中世前半までと比較すると、通りと関係が密接になったことがうかがえる一方で、棚の造り付け方、棚とその後方の部屋の区分といった部分に、それとは連動しない部分もみられる。

なお、通りと建物との関係でいえば、歴博甲本では、建物によっては暖簾や看板にサインを入れることによって、職業の種類や自らの存在を通りに示そうとするものがみられる。こうした暖簾やサインからも、通りに対する意識の高まりが確認される。

■中世後半の変化と市

以上のような中世前半から歴博甲本の間の変化は、どのようにして生じたのだろうか。

両者の間に生じた商業上の変化のなかで、史料上確認されるもので注目されるのは、市の場所の変化である。古く市は、寺社の門前を含む境内や、公設の市・広場等で行なわれていたが、中世後半には、通りにおいて行なわれるようになったといわれている。〔高橋二〇〇一〕は、その初期のものを座による露店であったと推定している。

この通りに立つ市が、歴博甲本のような風景に変化したと考えるのは、すぐ思い浮かぶ仮説である。この仮説を論じたものとして、東国・東北地方の近世町屋の成立に関する〔伊藤裕久一九九六〕がある。伊藤はそのなかで、「元来は「ミセ」を住居内にもたず、市を町に取り込む過程で、屋敷内に「内店」や「平町」のような仮設的な店棚が設けられる

ことから市との直接的関係が発生し、それまで道路とルーズな関係であった住居形態を大きく変化させていった」と述べた。伊藤は、さらに「都市史研究会 一九九六」において、「住宅の前に二間ぐらいの空地があつてそこを内店と呼んでいるが必ずしも常設的な店舗ではなく、差し掛けのように、まさしく葭簀とか床店のようなかたちの下屋を設けるといったものがまず想定される」としている。

また、同じ「都市史研究会 一九九六」のなかで高橋康夫は、「(京都の)南北朝前期頃からいわゆる町と称しているのは、道路に接した敷地、街区の中の前面の数メートルぐらいの範囲だった(中略)差し掛けのようなどころで商売の品物を入れておくか、もしくはそこで露店を開いている。(中略)少なくとも南北朝頃には床店、内店それから床店のものゝがすでに出現していたと考えられる」と述べている。

伊藤、高橋にしたがえば、座による露店から、さしかけをもつ「内店」「床店」へ、そして、歴博甲本の店舗へと変化したことになる。けれども、歴博甲本の店舗は、市に立つ「店」とはいくつか相違点もみられる。以下では、歴博甲本にみられる店舗の建築的な特徴と市との関係について考察してみよう。

■市と歴博甲本の店舗

歴博甲本の店舗と市との間に、類似性があるか否かについては次のようなものがあげられる。まず、附属棚のような仮設的なものが主要な役割を果たしていることである。次に、店舗が軒を連ねてまとまつて存在することや、店舗の種類として専門店が多いことも、市と類似する。

これに対して、歴博甲本の店舗と市との相違点は以下の点にある。ひとつは、商品の陳列場所である。市の建物は店舗専用建築なので、商品の陳列場所はいわば建物全体である。一方、歴博甲本では、陳列場所はおもに建物に付いた棚だけである。次に商品を陳列する高さである。市

では、「一遍上人絵伝」に描かれた市のように、土間床に近い所に商品を並べ、店員が座って売る。これに対し、歴博甲本の棚は建物の床上部分よりも高い位置にあり、往来を立って通る客にあわせられた形である。このように、商品の陳列場所や棚の高さだけを見ると、歴博甲本の店舗は中世前半までの店舗に近い。

もし、伊藤や高橋のように「内店」「床店」として差し掛け庇のようなものを想定するならば、それが常設化したものは建物の庇空間にあたる棚後方の部屋でなくてはならない。けれども、棚後方の部屋は商品の陳列場所にはなっていない。それでもなお、歴博甲本の店舗建築を市の常設化とみるなら、伊藤や高橋のいう「内店」「床店」は、むしろ棚の部分となる。同時に、中世後半には、腰高程度の高さの棚を用いて、立つた客に商品を売る形の「店」が市においてみられたということになる。

「棚＝市の常設化」説を支持したものに「伊藤毅 一九九二」がある。伊藤は、一六世紀中期の史料等をもとに、「おそらく町屋と棚の関係は、町と市との関係と同じで、原理的にはつねに分離可能なものであった。町屋の見世棚が近世に入っても、あくまで建築本体に付属する取り外し可能な簡易な装置であり続けたこと(中略)を想起する時、町屋と棚はそれぞれ別の範疇で捉えた方がよい。」と述べている。

伊藤が述べる「取り外し可能な装置」という見方は、歴博甲本にみられる棚の附属的な構法や、棚と後方の部屋の区分を考えると、注目に値する。けれども、棚と後方の部屋との関係は、棚の高さからみると連続性が考慮されており、間仕切りに使われている格子等をみても連続性の確保に配慮がなされている。したがって、歴博甲本の棚が、本当に取り外し可能な装置であったかどうかは疑問である。実際に、棚を取り外した形を描いたと確実にいえる町家は、歴博甲本には存在しない。

■棚・店の語義と役割

棚と店舗の関係は、史料上も確認される。一七世紀初頭に書かれた『日葡辞書』をみると「ミセ」は、「種々の売物を並べる店、棚、または、板」とあり、「ミセダナ」は、「売物の品物を並べて置く店、または、棚」とある。つまり、「棚＝店舗」という考え方と、店舗の設備としての棚の重要性がうかがえる。かつて「店」の語は、専ら市と関係していたので、語義にも変化があったことが知られる。これは、歴博甲本にみられる棚が、中世前半までと比較して重要性が増しているという先の推定とよく一致している。

歴博甲本の棚の役割は、商品の陳列だけには留まらない。例えば、「水藤 一九九九」は、歴博甲本にみられる棚を、現存する町家にもみられるバッテリー床机（アゲミセともいう）（図8）で、「ショーウィンドー」であったとみている。

このうちの「ショーウィンドー」という見解は注目値する。歴博甲本には、道へのサインとして、暖簾や看板が描かれていることについては先述した。けれども、暖簾や看板をサインとして使用している数は少

図8 バッテリー床机

ない。また、暖簾や看板にサインを示した家には、棚がみられないものが多い。反対に、棚がある家には、暖簾や看板のサインがあるものは少ない。このことは、棚に陳列する商品に、商品としての役割だけでなく、店の性格を往來に示すサインの役割があったことを物語っている。

一方、バッテリー床机という見解には疑問がある。なぜなら、棚の高さが、人が腰掛けるにはやや高すぎるからである。また大きさをみて、簡単に格納することも困難である。さらに、細かい点をあげると、棚の脚元の構造も、格納するには不向きなものがみられる。実際に腰掛けた人の姿も、歴博甲本には描かれていない。

なお、「高橋 二〇〇一」は、歴博甲本の棚を、半部をおろして棚としたものと推定している。棚の脚部をどう納めるかに問題はあるが、棚の構造や大きさからみて、その可能性はある。この場合、棚と部屋の床高のレベル差は、床面から窓台までの高さで建具の厚さの和ということになる。

③その後の店舗の建築

建築史学では、歴博甲本にみられる町家を、現代も京都やその周辺に残されている近世の町家と基本的にかわりないものとする見方が一般的である。例えば「玉井 一九八三」は、その例である。

けれども、これまで店舗建築を検討してきた観点に立つと、歴博甲本店舗と現存する近世の町家には様々な違いがみられる。それでは、歴博甲本の状況からどのようにして近世の町家へと変化していったのだろうか。最後に歴博甲本以降の『洛中洛外図屏風』を用いながら、その様子をみてみたい。以下文中に「〇〇本」とあるものは、『洛中洛外図屏風』を示す。

図9 上杉本の店舗

図10 勝興寺本の店舗

図11 舟木本の店舗

■ミセノマの誕生

最も目立つのは、棚とその後方の部屋の変化である。建築についていうと、まず、棚と部屋の間仕切りをとったものが目立つようになる。これは歴博甲本と大きな年代差がない東博模本、上杉本(図9)で既に確認される。次に、棚の位置が低くなることである。棚の高さは、部屋と同一または部屋よりも一段低い位置のものが目立つようになる。これは、一七世紀初期の京博本、勝興寺本(図10)において確認される。さらに、棚に商品を置かないものが目立つようになる。これは一七世紀前期の神戸市立博物館本、舟木本(図11)等において確認される。

商売のスタイルについてみると、棚と部屋の間仕切りの変化にあわせて、部屋の中に商品を陳列する店舗が増加する。次に棚の高さが低くなることにともない、棚に腰掛けた形の客が目立つようになる。さらに、時代が降ると、棚だけでなく室内に上がり込む客が目立つようになる。

以上の変化から、棚はバツリ床机に近付き、商売のスタイルは、鉄道駅のキヨスクのように店員が窓口で客に接する形から、部屋の中で店員が客に対する形に変化していったことがわかる。なお、時代が降るほど、建物の内部が店舗になり、客が屋内に入り込むことは、「宮澤 一九八〇」が既に指摘している。

『国史大辞典』のタナの項目(中部よし子解説)では、「江戸時代に入って(中略)店は室内をさすようになった」としている。これは、『洛中洛外図屏風』に見られる変化と、よくあっている。現存する近世の町家では、通りに面した表側の部屋を、「ミセ」または「ミセノマ」と呼ぶことが知られている。その原形は、神戸市立博物館本・舟木本等にみられる室内に客が入り込んだ風景に求められるだろう。

■座売りと陳列式

舟木本等において、室内の客と店員は、ともに座った形で描かれてい

る。このような、商売の形態は近世を通じて行われたようである。近代の店舗建築を研究した「初田二〇〇二」は、この形態を「座売り」と読んでいる。そして、近世の座売りに対して、近代に入ると、土間に商品を陳列し、客が立ってみながら商品を買う「陳列式」に、変化したと述べている。

中世前半までの店舗や歴博甲本に描かれた店舗の形態は、棚に陳列された商品を、客が立ってみながら買う「陳列式」のようにみえる。それでは、座売りは近世特有の商売の形態で、中世にはなかったのだろうか。もしそうだとすれば、近世にはなぜ座売りによって商売を行う必要があったのだろうか。

現在でも、契約書を作成するような重要な商取引において、立ちながら契約書を記す者はいない。商取引を行う者どうしが同一の席に着くことは、契約行為のなかで、必要な動作といえる。座売りは、この契約行為のために行われていたものと考えられる。座売りを契約行為とみると、陳列式の方は、商品の値段を店員と客が予め了解していることなどによって、契約にかかる時間と動作を短縮・簡略化した取引の形態といえる。商取引にかかわる契約行為は、中世にも行われていただろう。商品の価値・価格や判断基準が統一されていない時代においては、契約行為は近世以上に重視されたに違いない。したがって、中世の商人達も、契約行為としての座売りは行っていたはずである。

■商家と店舗

それでは、初期の『洛中洛外図屏風』までの絵画史料に、座売りの風景はなぜ描かれていないのだろうか。その理由は、当時の商取引においては、契約を通りからみえる場所で行う必要が無かったからだと考えた。言い換えれば、近世の特徴的な点は、座売りのような契約行為を、通りからみえる部屋で行っていたことに見出せる。これは契約行為の場

と、商品を陳列する店（棚）を、同一の場所にして、通りからみえる部屋をその場にあてたと解釈できるだろう。

このように考えると、歴博甲本と舟木本等との間には、大きな商売のスタイルの変化があったことになる。筆者は詳しいデータを持たないが、この時期の京都には、豊臣秀吉らによる都市改造を契機にして、他所からの大量の人口流入があったものと推測される。当然、往來を歩く人口も増加しただろう。商人にとっては、そうした人々を客とすることが、商売の繁栄に直結したものと考えられる。歴博甲本と舟木本等との間の変化の背景にあったのは、こうした事情だろう。いずれにせよ、店舗の建築と通りとの密接な関係は、陳列の場を室内に取りこむ舟木本等に見

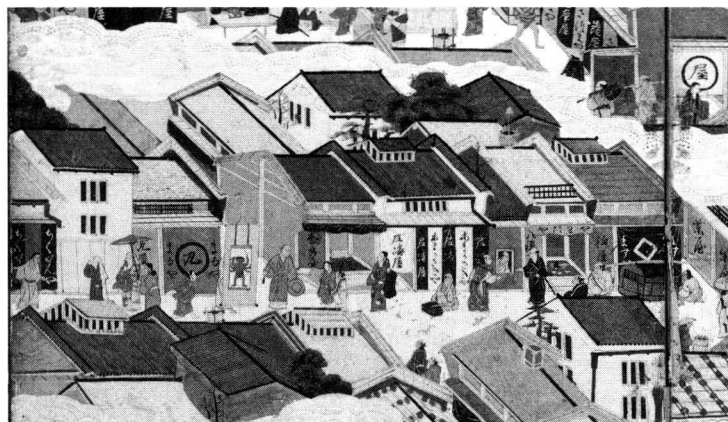


図12 『洛中洛外図屏風』に描かれた商家

られる形態によって、はじめて出来上がったのである。

一方、初期の『洛中洛外図屏風』までの店舗においても、契約行為の場は通りに面した部屋または通りに近い部屋であったと推定される。現代の住宅でも客間は、入口に最も近い場所に配置されることが多い。寝殿造や書院造のような上層階級の住宅でも、接客空間と入口とは直接結ばれる。このことから考えて、店員が客と契約する場も、建物のなかで入口に最も近い場所に置かれる可能性が高い。町家でいえば、通りに面した部屋ということになるだろう。

それでは、契約行為の場と棚の関係はどうだったのだろうか。往來の通行人を客にせず、特定の客に対応するだけであれば、契約の場に棚は必要無い。契約の場には、せいぜい商品を収納する場や商品見本を置く場があればすむ。棚をもたず、契約の場を持つ商人が経営する建物。中世には、このような建物が存在したと考えられる。この建物は、棚をもつ店舗とは区別される。それは、「商店」ではなく、いわば「商家」といえるだろう。

商家は、近世にも存在した。実際に『洛中洛外図屏風』の各本にも、棚を持たない町家のなかに、商家と考えられるものが多数描かれている（図12）。現存する町家にも、ミセノマの正面に格子が入っていて、通りに向かって開放できない部屋をよくみかける。これらは、「仕舞屋敷」などと呼ばれるが、店舗をやめてしまったのではなく、商家であると考えれば、ごく普通の構えといえる。こうした観点に立つと、むしろ商家の契約の場が「ミセ」「ミセノマ」と呼ばれることの方が、特筆される。これは、舟木本等に見られるように店（棚）と契約の場が一体化し、その場がミセ・ミセノマと呼ばれるようになった結果といえるだろう。

中世に「商家」という存在を想定すると、歴博甲本の棚後方の部屋も、契約の場であった可能性が高い。また、これまで店舗としてみてきた建物も、商家であった可能性もある。その場合、棚は市を常設化したもの

ではなく、商家が往来との取引を意識して出したサインを兼ねた商品陳列の場であったと考えられないだろうか。先にみたように、歴博甲本の棚には、通りに対するサインとしての役割があった。棚を商家のサインと考えれば、棚の構造が仮設的であることや、棚と部屋が区分されつつ連続性ももっていたことに、説明がつくように思われる。商家が、棚を利用して往来に宣伝を行うことにより、事業の拡大や利益の増収を図ることができ、商店へと変貌をとげた時代。中世後半から近世初頭にかけては、そのような時代といえるのではないだろうか。

おわりに

本論では、中世の店舗の建築について、絵画史料をもとに、概略の流れを述べた。本論で提示できたものは、あくまで、絵画史料を建築史学の視点から分析して得た仮説に過ぎない。とくに、中世の町家における契約の場がどこにあったのか、商家から商店への変貌がいつ頃行われたのかなどについて断定的なことを述べるには、文献史料等からみた詳細な検討も必要だろう。

また、本論では『洛中洛外図屏風』の店舗を一括して論じたが、実際には、店舗の性格や種別に応じて、建築にも違いがみられる。例えば、『高橋 二〇〇一』が注目した茶屋をみると、棚をつくらず、土間で商売をしていた様子が歴博甲本に描かれている。また、池田本に描かれた魚屋などをみると、近代に主流となる陳列式と同じような店舗が確認される。それはまた、同種の店舗が数軒並び、専門店街のような様子を描いたとも考えられる。こうした店舗の種別や業務の性格に応じた違いによる詳細な検討は今後の課題である。

同様に、『洛中洛外図屏風』では、通りに応じて風景が描き分けられていたことが知られている。当然、通りの性格に応じて、店舗や商家の

性格も異なっていたはずである。『洛中洛外図屏風』には、その違いも描き分けられているはずである。この検討も本論ではしていない。通りの性格や規模に応じた店舗や商家の建築的な変遷を追うことも、今後の課題である。

多くの課題が残されているが、本論で提示した仮説に対して、多面からの意見が聞ければ幸いである。

参考文献

- 伊藤 毅 一九九二『町屋の表層と中世京都』『都市の中世』吉川弘文館（同二〇〇三『都市の空間史』吉川弘文館に再録）
伊藤 鄭爾 一九五八『中世住居史』東京大学出版会
伊藤 裕久 一九九六『中世末から近世初の町と市』『年報都市史研究4』山川出版社
京都国立博物館 一九九七『洛中洛外図 都の形象－洛中洛外の世界』淡交社
水藤 真 一九九九『歴博甲本 洛中洛外図屏風を読む』国立歴史民俗博物館
高橋 康夫 二〇〇一『京町屋千年のあゆみ』学芸出版社
玉井 哲雄 一九八三『近世都市と町家』『講座・日本技術の社会史 第七巻 建築』日本評論社
都市史研究会 一九九六『年報都市史研究4 市と場』山川出版社
野口 徹 一九八七『中世京都の町屋』東京大学出版会
初田 亨 二〇〇一『繁華街にみる都市の近代－東京－』中央公論美術出版
宮澤 智士 一九八〇『民家と町並み』『日本の美術』一六七号、至文堂

図版出典等

- 図1 『年中行事絵巻』田中家蔵 巻十六 三十四紙～三十六紙の部分
図2 『長谷雄草紙』永青文庫蔵 五紙
図3 『直幹申文絵詞』出光美術館蔵 六紙
図4 『石山寺縁起絵巻』石山寺蔵 卷二 十一紙
図5 鎌倉『一遍上人絵伝』清浄光寺・歓喜光寺蔵 卷五 十紙
三島大社前 同 清浄光寺・歓喜光寺蔵 卷六 三紙
大津 同 東京国立博物館蔵 卷七
京都 同 東京国立博物館蔵 卷七

- 図6 『福富草紙』春浦院蔵 下巻 八紙
- 図7 『洛中洛外図屏風（歴博甲本）』国立歴史民俗博物館蔵 右隻4扇
- 図8 バツタリ床机 安藤邦廣他『住まいの伝統技術』（建築資料研究社、1995年）所収、35頁
- 図9 『洛中洛外図屏風（上杉本）』米沢市蔵 左隻4扇
- 図10 『洛中洛外図屏風』勝興寺蔵 右隻3・4扇
- 図11 『洛中洛外図屏風（舟木本）』東京国立博物館蔵 左隻1・2扇
- 図12 『洛中洛外図屏風（歴博D本）』国立歴史民俗博物館蔵 左隻1・2扇

（工学院大学工学部、国立歴史民俗博物館共同研究員）

（二〇〇三年四月四日受理、二〇〇三年七月一八日審査終了）

Shop Architecture in the Medieval Japanese City

GOTO Osamu

Initially, shops facing the street emerged as a result of converting existing townhouses known “Machiya”. The merchandise in these early shops consisted of everyday items such as food and shoes, and specialised products were not in evidence.

In the medieval period, the shop became a specialised type, with a built-in counter. In the early 14th century, shops are depicted in cities all over the country, but no shopping districts, with shops lined up in rows are shown anywhere.

The first shopping district appeared in Kyoto in the 16th century. The earliest example we can identify is shown in the Rekihaku-kohon, a screen painting in the genre known as “Rakuchū-Rakugaizu Byōbu”, owned by the National Museum of Japanese History. Almost all the shops in the Rekihaku-Kohon sold specialised merchandise and had large counters for displaying goods, which appear to have been removable.

In the medieval period, markets came to be held in the street. We can see the influence of the medieval markets in the shops and display counters of the Rekihaku-kohon. But the shop buildings in Rekihaku-kohon were not market stalls made permanent. Most of the display counters shown in the buildings in Rekihaku-kohon were in effect advertisements set up in the street by the merchants to attract customers.

In 17th century, the place for displaying goods moved from a counter projecting into the street to the front room of the “Machiya”. In this way, the room known as “Mise”, or “Misenoma”, characteristic of early modern townhouses (“Machiya”) made its appearance. At the same time the meaning of the words “Mise” and “Tana” changed. They ceased to refer to counters for the display of goods and came to refer to the shop building itself.